



州 靴 竹 子 序

学 鞋 履 一 編 の 女 一

香 中 志 氏 少 路 伎 一 編 の 女 一

千 葉 八 子 七 層 肉 井

側 一 編 の 女 一

一 表の順ハ名所とて

一 表の順ハ名所とて

一 表の順ハ名所とて

一 表の順ハ名所とて

凡例

一 表八句ニ祇祇釋教云々

一 表五ニ得の能なるは

一 表の順ハ名所とて

一 表の順ハ名所とて

一 嘉定庵とてかくと志るをりし師の坊に  
そとふりし藤乃の付むらひのひりし庵に  
今雷堂着立せり別社中の表と合す

以上

江戸苗別 百瀬下畧惣連  
二十余人出立

家屋も捨棄し涼し柳陰 葵太

比々清くみれば誘ふ旅は 吐月

君の代忠明和二年とあけし 周竹

若き時と累に雲よかけし 眞汝

照息ふとくれく月て物おれ 胤腹

袴掛り風をふたり 桂山

月けち牽りし釣も嬉し 信史

ちとせくく二枚の落馬 莊蘇

遊竹柳

るのく小ちの山なりく柳のけ

志るくくくくくくくくくくくく

け風誘くくくくくくくくくく

ふふふふふふふふふふふふ

許賀連中

一まのく陽あらし清ふくく

柳の乾く汗の濡る夜

三結小糸乃試染夕くま

連くくくくくくくくくくく

是袋天窓大工の伊まれ二所

口くくくくくくくくくくく

月あけ強るあけの秋もく

狐と健くくくくくくくく

藝太

一兮

周竹

洲江

孤帆

太

竹

竹

白川園

初とけうすうとまのまーく  
あそ風ろぬくま川の実  
みやこはく書集さし出ーく  
とら教ーく白川園

淡香連中

斤神そらきのれなり友あるも  
日まこく川そ二石の神蹟  
本がくまてあうひもの啼ひ人小  
淋やまゆまは公事乃お後  
たゆやうり心をまに深んをく  
女房さう包のふとー二十  
中垣も中結きふまの月書岩  
まきうあまむーくお中

葵太

露秀

周竹

園山

露教

梅仙

露滴

沾露

女積香山

東猪寺に坐する秋はく家一妻女は  
翠をいづくまの正席のまをりし  
行脚禁坐の哲あまを

取あけふ新茶も始一何さうや戸  
松実方北暮きまき一猪入とソふ  
系はう色くやふれやとゆいあふを同あふは

本宮古路く店連中

里人らにきき草とも花うけ

葵 冬

花白小乾く暮のみ月を

青 竜

葵酒のまき今舞乃池ま

周 竹

くまにたういくん墨別當

若 象

花あゆれく再ハ香の紙唐経

烏 春

かりく雲のあうまく新

雁 足

日弓若思民のゆも古はの

秋 史

床を乃政中ふあり服より

百 年

里塚の忠臣

陸奥のほくら、ふれ里塚

鬼ありのまら、まら、まら

まま、まら、まら、まら、まら

まら、まら、まら、まら、まら

まら、まら、まら、まら、まら

二本松十二樓連中

素子、素子、素子、素子、素子

素子

練、練、練、練、練

練

足明、足明、足明、足明、足明

足明

拍、拍、拍、拍、拍

拍

石、石、石、石、石

石

二、二、二、二、二

二

詠、詠、詠、詠、詠

詠

老、老、老、老、老

老



文字摺

吾溪猪白唐の紙阿まじ携  
手より松葉とくする葉の汁りて  
此石紙をゆきて我家を産く  
ゆ流たすと拾くく平包を解

信史一鵬樓連中

月々乃やいさ帽子小志おふり	葵太
桑くうはるる交葉の店	吾溪
改えを何くもさるてぬく	周竹
一日まくくそのねんなり	榮雅
ういふ腹なりあるいて多ぬえ	指月
まじ紙ようくして多お黄との	猪白
去りくふて六角堂れ朝の月	東吳
福さく火鳥の紙ハサリく	曉水

### 葛松系

ひしひと通理系宗の系後として  
公家の梵道よつたり今、秘宝編家の  
乞食として終と葛の表系とて

世の中の人よ、この松とて、たゞを懐りたれ

于時保元二年二月十七日、松が僧が学英、生年  
四十一申の別、おりのぬと、かゝ人の松の本と、けは、  
く、ひしひと、ひしひと、と、津と、より、か、い、  
香、酒、も、業、門、して、た、こ、ま、か、彼、松、の、表、系、  
ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、  
ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

### 桑折養耳店連中

ひきまゝ、まゝ、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

葵太

人、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

可貞

忙、お、と、暇、の、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

周竹

お、う、て、お、う、て、お、う、て、お、う、て、

田車

守、ら、ま、い、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

秀延

今、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、ひ、し、ひ、と、

射牛

今、月、お、う、て、お、う、て、お、う、て、

ト白

拍、お、う、て、お、う、て、お、う、て、

得秀

道祖神法樂

乃より一里ありきり草むしりて  
 神のいさやう宮居のまはり  
 家小の神使いそくくそは  
 後田志命ハおほくの  
 一子とあまの山仰る  
 祈りものこころの縁也

仙府止鳥居連中

け	祓乃	乃	友	跡の	枝	杉	ハ		
子	と	女	以	祈	る	杖	も	多	竹
奉	返	も	う	ぶ	く	と	嚙	牙	く
小	判	と	む	り	新	法	氏	と	ふ
干	て	並	網	く	破	ま	て	次	ノ
百	乃	遍	と	他	力	本	取		
思	き	ら	以	碎	せ	て	款	の	花
古	何	く	阿	ふ	ふ	らん	衆	月	

  

蕨	古								
素	里								
周	竹								
知	昂								
洗	聽								
松	起								
芳	角								
布	朴								

実方古墳

此の古墳は、  
古墳と吊るしは、  
朝延の御人、  
いとなく、  
なりて、  
いひは、

仙府嘉定店連中

雀少とぬく袖ありふと	薬を
嗚呼と紐く梅の	楚香
抄子に竈お軍勝	周竹
比丘尼の才法	穿石
何の波ふと	高
くくく	太
閑五	石
くめ	竹

武隈松

くさきせのむらさきん夜と遊ひし  
くほのみまよとあふんと御の二本れ  
あふのなまよきやうなまよしうのりま  
うしのぢらうふ吹ううまきん片枝の  
あふらうちありはばう子業もあまのこ  
くしの世やとまきかーし

仙府嘉定庵連中

象たも松の音うし下き

藝太

涼こして月此夕あ

方水

鞆 志定む仲在退く小

周竹

書きこまき嘘守てりら

太阿

分教のうらもあぬ子い家ひよの

水

君を花ともゆくやまのくれ

太

人こ声うして師走の啼子鳥

阿

魂来まやう夜れ蛇なうんれ

竹

早志山

みちねくのちふくま川乃ちふくま  
人こもきん山の山とさうし  
こもきん山とさうしのなまき村田小  
入て何く得壽う樓上く一極麻紙

村田大唐窓連中

か し の も 言 わ す の 山 涼	里 を 言 ま り 紅 乃 山 り	傍 の 中 に せ う く と し て	何 の 名 は め さ は 物 り い く	潮 煮 者 う ら ん と 潮 う 治 へ と	賽 ハ 帆 と 揚 て く	名 の 影 と く け く 教 柳	こ も き ん 山 と さ う し
藝 太	得 壽	周 竹	雪 氣	雪 頂	普 千	尺 童	茶 暎

名取川

陸奥よりとふ子に名取川  
なまのなまきくはくろくろきる  
只名利の控へたるはこころの  
あしひのまじりやなまのまじり  
くろくろのまじりやなまのまじり

仙府是冰店連中

涼しきやぶらぐの家紋にすき水	葵太
むすむの影は花より地本	芳角
世の中ハ途切忠沙汰年三々	周竹
うら結納の女大車一こ	氣車
高凡小せ妻くくして薬の端	李角
それと私と先隣同士	雨夕
夢く並目意讀乃夫下一	芳水
きせくわはは居れぬ七又	角序

愛宕眺望

萬葉集卷十八天平勝宝元年

五月十二日賀陸奥國出金

須賣呂伎能御代佐可延年等阿頭麻奈流

美知能久夜麻爾金華佐久

こゝろのいふし一信し今や仙府は

長安十万余はをりて人一日控司のぬし

つらまらけりて世山とあまひし附

仙府嘉定后連中

波二日北蔓しとそし今華山

葵を

青田をちゆか白帆何被

橙司

成まふふと曾呂利通解し

周竹

ふふの綱ととして居りあり

夏雲

組町をむしりしとく北蔓をこれ

司

出むふふ人へ繁夜の中を

木

毛纏の夕とをさす夕月夜

雲

徳口ゆしに草とらへふ

竹



女下

みさゆきひらりとせ  
高城野乃木のり露ハ  
る小まきとせり

仙府嘉定唐連中

水音月の夜に是る女陰に

蓼太

杖もたれく小立を涼風

女琴糸

側くくあふじえくのせめこい

周竹

喉乃慕整と障子ぬり

女白之

遠くふ姑蘇城介れを山奈

琴

有ゆのさす舟小顔城

太

秋をふここの信忌胸あひ

白

唐すけゆく草乃初物

竹

宮城跡

治まる代の市店ハ新以ありし  
農と世とをら山に家はありて古

名所もはるくありぬるのこねり

きりひの川のほとり

國守より境本に松と榎並びて

及うらぬ及ふ地跡とひしれ

またあまふりぬるひしり

なみりーく

仙府冬至店連中

三きくこそ秋もびくの錦くれ

葵太

月老ひのと跡と探登

東驪

とりれ日と木の端乃袖ぬまこ

周竹

そまの敷と痛てこまれぬ

急耳

一歩はゆるら様うけり

拾紅

大坂松子よりやい黄盆

春耕

猪牙てゆくとも不そり

丈芝

及立所のうらぬやう

拾瓜

十香菅

みらぬくの十香菅  
七ふりた 香は 寐は ぬりて  
らぬふ 家 祈しん

仙府嘉定居連中

祖父婆くの姿 寐もゆく 菅の秋	蕨を
むしなうくく 香斤里乃月	孤峯
軍記ふふくも 雲扇控りゆく	周竹
むしはくくく 文工てもなり	三峯
水の子い 氣をく ぼをぬあつに	孤
日とり 車とを 雲の下陰	右
不ぞと守 証とく けいゆりけ	三
千葉子も 茶の 焙がぬ中	竹

壺碑

風土記曰坪碑ハ鴻の地小なり  
昔鎮守府の門碑より惠美朝舊  
之と假造一法書を見雲真人  
みして今崇千輩のかつてな小  
浦まりといはん

仙府嘉定居遠中

その墨石入るやふりひ	藝太
城ありて丸る木の末枯	歩明
草履よりあつた月れら張て	周竹
松乃以ちし足日知り	麦車
姫君小流ややりし芦れ露	明
亭神一四く玉本草々散	太
門表れ穴なりやまふ善うり	車
あやしハ伊賀マ川屋敷とこく	竹

米松山

葵より船くさるに袖を志ありけ  
き急のきや戸波くさるに

か山よ波さう宛きうきもめ  
象より志あ人いけり

仙府赤定庵連中

秋風や今もゆるりと波のき

葵冬

雲はちくく小月き古寺

習庵

笠人う夜きうらうさものとし

周竹

思葉の卯れ幣く急きか

迎水

鴻原も虚小居て実く何きぬあり

斎

るき久くきき君のわけやの

太

かへふと下目うんく油より

水

いあけりひき光廣の湯

竹

野田玉川

夕はれは汐風うてみちかへの  
野田の玉川ちを鳴なり

今八川あきて田こなり

このころより細かなるまは

残りも哀なり

陸軍連中

遊きそくきく尺もや川子も

藝太

一幅さる袖もあふうあ

征夫

うなひさう稼久もさ月晴く

周竹

吹夢叫と何異ふとも

真行

遙るも改不之為れ蛇くさ

史

新藤を何る謠代お傳

太

梅 平日のまきくもさる冬ゆれハ

竹

又す乃麦ふくもさる白音

竹

松鶴

花紅紫阿りけ浦乃煉のくまき子智れ  
浦之全るまきけ海秀奥り船をふい  
して今宵ハ旅店の樓をゆきまき  
奉ふ七月十の夜は月又文堂のねん  
より吐て浦と水とをまらるるまき  
宵然とくまき奥人の顔はまき  
む金かりけは島のけりけの

朝帯や阿より恋の子松鶴

葵太

日下湧うらむ波のまね

奥行

かふくと新酒のくまき

周作

みつき歌れまき

海秀

ほ叫の李婦人のまき

行

風呂出た歌乃松竹夕景

太

うらひあれ竹小まきのまき

秀

常解け工の醜山科

竹

平泉

最後の戒衣つゝかきゆり平泉のふらんを  
 へらに大浴小車の行りて帰ありたたれ  
 家くちと朝びりひむらまりといとやきき  
 暖のこゝにわはまきる人を敷わら  
 こゝとふいばちりんもきりなまけきとの  
 令結まきりりまききやうみり女房の記  
 こゝとす糸にた柳のは前とみりて春の書と

徒は風もる伽藍の赤くた神とちりて  
 かゝた空方の風をびりて夜の寒いとあまの  
 けしきのひと和泉式部う歌情とそよよ夜川の秋を  
 こゝと波のまはしと海をえり涙とそよよ夜流の星  
 月の山になつて薄白のこゝの香の暖を思ふよる  
 室根のたもとをねらひたはまききとひい  
 いませ鳴くしらぬの里のまききとら  
 何ちう鼓を和らけりてる毛織との堂塔  
 禪房の音守中との寺令色堂経堂吉祥堂  
 下ら



神社仙園山の日映し月をやかにほくむるに  
 柵と後土和泉三宮の石あり臨流岸と抄山と川  
 流ありて館とさかり源延射うはききるをあぐり  
 流星の山と遠くゆく交ふまうこまこるまいて  
 秀衡一門の愛翹文とましくもはら守口をあやさんするに  
 風と裂結とさふる目は収むるに実天の梅はをき  
 標もまいてはけをわいと標ふ露を九皇を街と  
 子秋とくしは糸は十笥の浦と天とをき  
 古今まき

山目連中

山ろひえ川なるまきり秋の風 藝大  
 云こもっらるる月 桑林  
 出りりまきり臨流の確踏く 周竹  
 寺まきりめり瓦子年 筆之  
 怖く小蛇り軒とさしのを記 林  
 け世れまへりる合あり 大  
 如席もこけり流英の流ひくく 之  
 初志標とまきり 竹

緒絶稿

みち乃くの取とては信やあまのしん  
あまぬまの才はこころゆくらん  
と誦るは古河ととる家のこころま  
ちりて今も旅人ととるあまのぬ  
こころゆくらん

仙府嘉定居連中

朝こころの結絶や搦ひし	葵太
榎きあつは行あまの月	綿水
本鬼小百物こころおどるれこ	周竹
ね又葦麦の集後をゆく	如文
ふ月あのみやこハ華々降らら	白花
二十三年中の帝もあまの根	四友
袴きこころもあまの根	陶家
無言妻小菜飯こころ	水長

草鞋

六

亂波遠色

ゆくま二匹橋と目洲しゆれ  
らふたにんて家宿れ地きり  
まのうら川右とるふとまきり  
東泉禅林ふちくく足と休む  
あつらん風強のなもりく福を

武蔵川菰連中

廉の毒や子あつらふみまれ川 菰太  
眠るまふにま和中の月 蓮戸  
田新助風炉の金波を酔て来く 周竹  
臥中そらとハ嗚呼くいさや 如隣  
吉原に意とふまのなうりま 都門  
神の遊過も門乃禰本 來廟  
一尺乃信小成きりまき風 風繁  
亂れあやまのたのとりあり 破弓

赤岩

五菊と出くさせ綿とくさせ  
と約せしはきく人の帰景亭  
うらひ遊囊とかくる日と

武新赤岩連中

菊の多やそ急所九日と花乃奥

葵 左

是小百里の尺の中赤岩

帰景

浮雲此二階の娣嫁かくまひて

周竹

胸のうらゆる卸てハなん

曲枝

校る雲狐とくさる善くし

波城

木の葉おらうして千鈞破碎る

又出

双六乃負と懸盤へくさる

山史

八百菊屋おせまふ太

都川

名詠

仙臺冬至庵社中

おりふ海と重くそむきやそ秋の春  
 東 鯉  
 松系と出で松乃阿ける落葉小  
 春 耕  
 馬取の喰跡さきし落葉子  
 芦 百  
 月と己う角やうらうて麻北声  
 菊 史  
 羨鮎や多々むゆく水かき  
 菊 二  
 山細や日所落くる大根川  
 拾 紅  
 葛の紫いさくぬうりなりけさの秋  
 右 幸

伊きま葉ももつりきぬまは里  
 菊 好  
 七夕や柳も暮乃系たつて  
 拾 瓜  
 さぬ雉とくすまもつり風中  
 鯉 子  
 松しほや只夜もこあまの父  
 利 天  
 苔の戸と心歌く川、鴨乃春  
 文 芝

止鳥庵社中

晴も目録は中しそ春やぼからし  
 布 朴  
 ちまくとおめふ花つり蕎麦畑  
 和 文  
 うはらとの萍こしてほろ小  
 麦 里

すゝきや蚤舞ひの目初こゝ  
水際と池の坊より柳ふれ  
夕立乃をとりさうらや虹の橋  
いけくりは松と吹きそとまゝ  
木塚多や家本由らも眠るも

芝非店社中

洗徳  
松超  
北里  
笠也  
知昂

常焼こからさ命や三巻くす  
出女や袖くららふ紙衣は  
くひ屋や跡のつねと沖の船

芳角  
芳泉  
李角

番祿屋のぬく糸もな一秋の昔  
くくひすれ迷ひ子とけり京の町  
みーっ夜や基のつと片陸れ  
本がうー二月ハ艘り富士乃山  
鬼灯や娘や譲る荒るさけ  
鞆やと人しとらや浦乃秋

青燈下社中

角序  
一歌  
嵐十  
風沙  
雨夕  
嵐来

嘉定店とたりて

稲ひーろんをくらや茶はくさ一

祇川

とろくく水の程や小春一々礼  
湯豆腐と暮れ暮やこもり船  
やきりしと晴月ハ連一船向ふ  
あらしあふ石と隔るを如茶代  
自入とぬまのほくく尺若の梅  
おとゆ一と遊技の塔や銀子れと  
糸物ハ各うのせや花乃や戸  
山さのこ新せぬ星や花 詩  
の造り名ハおろくま一菊の酒

呂音 湖口 三夕 此水 林石 端里 固有 又風 岸松

志うくや茶れ本の井之銀子の声

岩沼

千苓

嘉定店社中

月らこくもたりて踊り船  
かこくく一むらぬのこをばくれ  
人形も皆形代となしれり  
光陰の記とめくばや新燈籠  
あけたりと捨きいすのや顔形也  
弓勢をとりて其のかりし子  
蔓とのに結ひめ出来てらん不代

習齋 楚君 太阿 方水 麦雲 麦東 孤峯

秋多や白いと赤い婦妹  
 泣きもあふひ初喜や雨後川  
 厚ゆく山や綿の織いりき  
 再得て日よときそり女帝也  
 驚とこそ花はたふれ鳥爪  
 翠水も岩道水や夕の月  
 名月や波あふり花山しる  
 稲妻の端はるしや丸木橋

三峰  
 穿石  
 白花  
 月廬  
 完章  
 紫式  
 如文  
 魁耳

嘉定居士中

泊竿小畑鴻しん紅葉新  
 石山も舟く早るや夕の月  
 菽入乃綿く女とり木綿代  
 多草や指と冬乃まき取  
 美餅や高良は晒の搦りめ  
 萩萩の骨こたりら枯跡く礼  
 妻乃徳れまをうつハ美菜水  
 松小屋の就之出来て木の芽水  
 くらりきも木橋の縁とくらり

橙司  
 近水  
 歩明  
 陶家  
 緑水  
 四友  
 水長  
 丘車  
 真行



就之入松塵の隈や清月  
羨草や味方う原う立りり  
去もゆき各の袖くく不き梅  
浦苔けや入齒をひいて照のうへ  
福治の香や為又の伽羅の割心  
淋しきや板ふく子干大根  
軽くやあさく嚇と後て何り  
名月や空りあられをまは約  
魚のうみ流れあまりや初志くま  
海秀  
臘扇  
急波  
月嵐  
山曉  
魁峯  
李山  
琴松  
白之

入おや虫の指おかき急乃秋、琴糸

山目社中

授けきく心とゆい急ふお撲う分  
阿ふくもあはらまきぬ田螺ハ  
物人乃義く寐て居る麻子式  
菽入を泣きくともや守奈く礼  
帯むとに細りて衣く夜川  
蜀黍も日敷のうりて牡丹ハ  
誰碎てそとくし泣く教さく  
素林  
筆之  
稻秀  
里皓  
丸之  
曲枕  
菊山

宵月の光をるる内くらりれ  
わしあひのや月も念念と雲くま  
をらひとも嬉ハあらはや芥子の花  
松 峨  
草 嘯  
梅 里

宮野社中

黄昏や故やりのうらと里ひそり  
ちぶらうら、虚く在て哀の柳ハ  
魚くみ此味やうらりの志やれ糸  
横雲乃帯引きく月口と星  
むし何や菘ももうら雲の帯  
澄江  
玉 翁  
麟 趾  
西 河  
芭 月

梅子やあまのやせりたる石比翁  
あふくくこ効くえりり反柳  
虫りしふすそぬ浮世や比丘尼ち  
柳 江  
摘 芝  
楚 江

村田大庵社中

入月をちを細みちや藤のうき  
跡も山を吞まきく廣く旁乃海  
之日月を様といくく其苦言ハ  
片足らぬく失く驚れ言尺ハ  
之海らうと効ぬるこことふりれ  
増 寿  
雪 嵐  
普 午  
雪 頂  
茶 喉

一 菖蒲乃沖よびま居るは下ハ 尺童

兼折巻耳店社中

いさよひや星の代算る園少一 可貞

十六夜や一度くく心八百八島 回車

新坊と育しり一ふわのさうさ 秀逸

夕くまふ心乃くく柳の如 卜而

呼工糸一足ま一ぶ踊代 射牛

福清一鵬樓社中

曲ふや奠も雲のひ沙海水 吞漢

初中く之里よ一りあう汁 指月

あら秋の園と隠すや十六夜 猪白

新月の孤一さあや妹宵山 曉水

月心とめそのにきく柳小 涼花

夕くふや陰のむ所候くり 菊雅

青やれ葉つうたハ柳の如 东吴

二本松十二樓社中

志乃めいこうめ雲や山 椽 一聲

水多れ空をかけるや汐干沼 市井

末うきやまの跡くくは蝶何世 春丁

かま古結と店社中

尻去りて啼や月くまのかんこ鳥 青竜

茶ゆくくや端まき了茶乃起あり 秋丈

田一枚くくはゆして水鶴水 雁足

なふらまき了番をたふい草物 萬象

園とり此分別沈くちりりか 為春

秋の日や秋老くくく秋法師 長江

くくはたぬ人乃位あや書の竹 素明

須磨といふにそら一向も秋の巻 百年

香も茶も汲く菊のちりりく礼 樗門

乃りりびくくや夜まは清のく息 北山

花よ来り了るそんちりりきみらりり 泉之

ものくおむのそちりり月の際 百川

皂角く風のそりりや秋乃くく礼 篤甫

合持乃町と曲まはたふぬさうり 竹堂

安積教重齋社中

十九和の一連本よりまきと云佛 落秀

七種や秋ハきぬれ膏の香  
 菱の花乃一反てり盛るか  
 幸崎のゆゑに松子と異うか  
 夕の海や馬と川にむ花水中  
 七夕やまの志をきかすあゝ海  
 くの秋や藪へ了る蝶ひよひ  
 本からしや神と山くの早あり

落教  
 梅仙  
 圃山  
 治蓋  
 耕夕  
 露貞  
 露滴

茶のく礼や平等院ハ冬木立

白石  
 麦螺

夕家ハ裾ぬるるり女七夕

南都  
 星露

才ひしゆ小一回ふさくや去用干

出羽酒田  
 斗南

猿ハや林も室くく花乃瘦

山形  
 千和

碑も角又字くくりてかす片あり

大沼  
 寧室

片くまは守虫とたんで磁く礼

上山  
 投茶

狸くの飲おひりり細代より

六川

初尾や色くくくをたぬりりも

秋田  
 松葉

羨しくきて風やうさす桂うら

象傳

湖南

菜乃くまに添ていささる如蝶小

志津

韓流

花の酔さゆしと半りやおろる月

志々

冬くまにたかじ枝もけり柳うら

柳思

薰雪

さうとある芝あくらう花の陰

評員安吉

一兮

半勢さむとくはくぬ桂うら

上及神田

朗舟

喜くと毎乃右まら雪綴小

雪宇

水ぬるむらむら喜き柳うら

大江

馬の子れ母にけくく反せ小

蓼莪

鳥等して毎こりけり入中魚うら

雪返

晴てくく声乃藤くく蛙うら

鳥雪

武及赤岩

父のぬ一本志秋やふれ月

帰景

妻の喜も裾澳さすはうら

都川

ふりハ捨て喜向や大板川

曲枝

不そくすす心や墨絵の雪いふら

五出

何一ちひや水とたてても岩ぬら

山史

夜は星は氷なりけり水紋心 裁若 波城

月夜や雪花 川友 蓬戸

禪堂乃社なり笑ふや鶴改む 如脈

狐火や人々寄りて枯野小 都門

乱さぬを門とまきく石う礼 来麻

そのひよひお小強くし鳥小 風紫

阿ま〜て水不霜垂る果小 破了

本から〜や今青ハ道と客の松 山時

行秋の古郷（山乃所）記う子 松伏 三舟

松凡乃素々と来こけり初とくま 午雲

得くまの身に折く〜花紫バ 巴人

遠見掛川

日も一里もくなら時汐干く分 之園

響り細と初守和も何り〜花月 其挂

四やす〜さ園端志也て旅子の声 雪花

破〜来〜破又き〜汐干渡 鳥道

山吹や萩ハさのみふ水走も吉  
 阿市  
 泥を出て雲井の神や杜若  
 吳笠  
 あやれる陶器や雛子のこゑ  
 嘉堂  
 飯屋も玉一物なりはくからし  
 やひと  
 阿まてうらす下右の浮所や雛糸  
 葵園  
 水走の勝つりてなく蛙  
 楚江  
 一日乃凡のよとこやおなる月  
 左葵  
 妻面や膝へこむる番番の巻  
 日明

あく雲の煙こなりけり山吹くら  
 相良  
 南梁  
 蛤ふ波の花有り去不ひり  
 望来  
 いふ凡こちうくくらん風中  
 警石  
 為棲花乃重くは夕秋子  
 东庵  
 上と見る妻となくして柳水  
 菊明  
 紅梅や神のこゑも雲くく  
 柳甫  
 澆やとあ忍てきりし柳う形  
 巴兆  
 皇く海や十粒くりれるの跡  
 激海寺  
 楚竹



松の介と書ふことの何初志くま

又羊

不とくは次あしぬ思は花くもり

尔因

枇杷司

子藤やま本のうへに並合せ

呂竹

玉川に振れやくる、嘘くれ

百瀆

面はあしうそくぬ雲と雲花代

雪支

漱とくくろ老の思書や文夜

兔園

河骨や水のちくくは嘆じくく

内田

桑女

星飛く園に後りり梅のそと

三曉

小暖啄の姉も来る日や冬の梅

波道

おふろ夜をかして三り梅の花

葵水

羨草や爪もおはゆる開くそと

枇杷

飾り書ハ貫ハ泪やそらり西

冬雁

志ろくとももろと交て終ハ

虚舟

送別二章

あくの花と写しん既陀やくら

柳家

さくしりや虚の喜れそりまを

鶴路

平川  
 又筑波の淵や阿まの河  
 一筋二日のまゝさや竹生跡  
 花雪を散らすもなほり花管  
 鴨も川や追くもさる水の隈  
 芦毫  
 湖天  
 其川  
 園二

送別

差一皮の首途の曠や善れぬ  
 矢立も約く一にさるり作く  
 真可  
 祇交

汗巻ハ石と賣りくも山雲奠  
 下陰と又箱ひくもや糸さく  
 之吏婦ともの喰て居る蚕く糸  
 うく日と持あふくも橋く子  
 和らくもや端をぬきけ彩法師  
 象磨の志す中になきゆくも船  
 志く菓や一まぐひひり船くもけ  
 欲する家ん身くも山さくも  
 初まハ候君とれん時面分り  
 後府  
 耳埒  
 葵丸  
 葵旦  
 雅堂  
 馬老  
 都雁  
 葛文  
 兀子  
 大耳

徳田

二種の浦並を往とみちねくの切柳とて

松島乃有途とてなす虫葉ハ し 呪

秋ふとてた社の社とてまゝにして老師の起誓と  
きすけけ古乃の旅思をぬるもまきとてたの  
年月の比と西上人の証をまゝと昔とてまゝ  
八子といひ風船とてれ死せんも四年と目撃す  
年なきはてそのこと別のあらばまゝ  
七竈店の際とてそのあふことと証すまゝ

行房れとの宿も秋と似たりたり 周竹

東武

あくあやねはとてより葱一把 天府子

梅うきやれとれ一本とてくまき 婆心子

若清水女むすひなうきさけり 史流

岩菘くうりむくやうとて朝日ハ 楚水

西雲のくのみくやいっりりり 樵澆

礼して八爪とりのひる柳うま 宜中

浦土乃女れ髪とてふや夕下 女 辞菊

美の女とてそして長一花の花 仙夜

子位の歌乃ららまこむの茶店あり  
そ谷ありの社文磨くし飛走のまの  
ふへーいれといひのひや不思役の夏加と  
紫しより藤の茶うぬれをわたりこり  
んこけあそんかろりし白りまうへー  
日やけんこつらん谷の鏡山 葵太  
奥波程送りややん赤雲といふおまき  
志しひ本よりむとねうの夜れま花も  
いりやこりまにをく

青瓜や蔓とくままで伏すらひ 奥波

平心入長途のり末まなく  
志きりこ袖のりむたひて

端切て出しうふら雲見 葵太

高申お師のり柳こつうん  
まーいさやうゆる帰帆の為眼織  
ころこ回九袖ささしてこりまう子  
新あまぬおるそしけま本下寄  
さすふよりかきふとる扇代  
ま竹や奥の細乃くまうり  
葵太  
専式  
新海  
百頁  
空杖

笠や川流しを影や清少島  
照入梅と尺定めも一松 是  
涼一さや政院も月尺の秋

白牛  
東川  
素丸

出羽玉の経道一して

象渡の矢ふ神もとりて月

周竹

周竹と象渡もくろれ

平八躰過う是く何ふ

名月や波よりひとりの浪華山

葵太

吹よせく後之花乃り来う如  
誰やうく去りし秋なり月  
受たりもらいた記さのそ初茄子  
雛乃駕二子の肩れそらひり  
鬼味噌の浮名いたぬ祓んそ  
人稀く来場もらぬ子う如  
書打とあして遊む所くられ  
山よりや月のあふへち朝日山  
白川や園より月けて雲の峯

南陵  
女南室  
鳳宿  
菜路  
是物  
西流  
翠羽  
嵐亭  
周竹

山菫の花奥ゆゝ志乃ふ摺

周竹

仙府の一庭と結ぐ膝もと日ハ

六月十六日くぐりま世や習子阿母此  
閑室に棲よのそりくくそん

海貫ふ隠居も世一嘉定居

葵太

七夕

長右一て里の一本小笑ましん

花のゆゑきく卯の花と成こけり

そのいそぬ客もよふれ世はくそ

燕や夢さるるくふ翠のくく

、

求光

眠我

桂山

譬一暇言くもくもやまはる

山幸

夕く星はあゆぬもあふれ角力ぬ

祇什

予仙ももとのまてやすふ田螺川

女

祇三

松島やまきくちきりて秋乃雲

周竹

緒絶橋

結くく結絶くきりてさすま

、

系報改策藤ハ結くまふりり

班象

七粒や青の拍子と女きまらる

富屋

山部ゆの志さりとてくくて鹿代

翠光

上風と沖つもさくやあつ子多  
水もい戸折えおろ新く氷柱の子  
鳴戸も氷の影ハたりふれ月

毛越寺覽古

礎とかさくたまして秋のくれ

光堂

善是下亭脱きそ何むり堂  
日くくや昼飯くさふ光堂  
梅咲や根くさく書ハるなう

信文

雲介

落梅

葵太

周竹

人た

曉のゆらうさくさく去るふりれ  
夕ふれおや故やりの夜更  
友のくれ社家の流れ通ひけり  
本巻乃夜もさなはくさくさく分  
何きくも筆お用さう猿月

実方古墳

塚よりぬ友さく門と木下園

文壇評細原

芝森と美くく訓導ん夕原

氣腹

女 貞知

梅人

祇考

阿音

周竹

葵太

只ひと山お井に遊ぶ蛙う船  
 六窓  
 梅う香を繁こと失くや猫のこひ  
 連犬  
 多能や柳の影に追まると  
 乳峯  
 うれしくこちのさうくる歌う子  
 柝太  
 どのいんぬ夫婦を足り田草を  
 葵太  
 魚うゆやまゝい枯跡の中小 嘆  
 周竹  
 本場らまゝ大工れあゝぬ水鶴小  
 太喬  
 曉の價はうらうらぬれの言  
 舊國  
 牡丹うくろの傍や妓王妓女  
 完車

名月や日乃十五日とれてとり  
 飛鯨  
 そふあら衆目とならう鶴尻花  
 周竹  
 名月や水こびくと恒忠月  
 盤古  
 六月や沖小帆うけてか卫船  
 雷堂  
 秋風す煙ひるのあふり  
 吐月





